
幸運保険販売員

フィーカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸運保険販売員

【著者名】

フィーカス

N4267P

【あらすじ】

自分の幸運に対して保険がかけられる。こんな話しがあったらどうでしょう? 「幸運販売代行店」の続きに当たる話。

自分の運には保障が無い。今現在幸せであつても、来年は、来月は、明日は、数時間後は幸せであるかどうかは分からぬ。

だからこそ、今の幸せな時間を大切にする必要がある。それが人間というものだ。

人の体には、人の命には保険というものがかけられる。もし大きな怪我をしたり、病気になつたり、あるいは死んでしまつたとしても、保険をかけていればその分お金がもらえるという制度だ。

もし、自分の幸せに保険がかけられるとしたら、果たしてどうなるだろう。

「あなたの幸せ買い取ります」

今日も怪しげな看板が、風にゆられて店の扉の前で客を待つ。「幸運販売代行店」という名のこの店では、人の幸運を寿命で売り買いできるという、なんとも非常識な店である。

だが、そんな怪しい店で、今異変が起こっている。

「きよ、今日も恋愛運の買取が多くたわね」

営業を担当する、すらりとした体型の姉・アティカが呟いた。

「今日だけすでに8件豆腐。一体何が世の中で起こっているのでふか?」

経理を担当する、高校生平均くらいの身長でややぽっちゃりした妹・カルチエが帳簿をみながらパソコンのキーボードを叩く。

今まで金運、仕事運の在庫・買取が多く、在庫過剰な状態になっていた。恋愛運は求める人こそ多いものの、ほぼ常時品切れ状態であった。

ところが、昨日から突然恋愛運の買取が増えたのだ。一応、恋愛運を求める人も若干いるため、寿命売り上げ的には赤字にはなっていない。

「うへん、しかし仕事運が急に売れるようになつたでふ。セットで金運も。さじさて一コースではどうなつてているのでふか……」

カルチエがネットにつなぐと、今日の一コースが表示された。

どつむ、昨今独身ブームが起つていろいろじへ、一人暮らしで自由に過ごすことについてのさまざまなコラムが展開されていた。

「ふむふむ、どうやらこれが原因らしいでふ。独り身でいたいから恋愛なんてしたくない、その代わり一人で暮らせるだけの資金が欲しい、ということみたいでふ」

「な、なんてやつらなの！？私なんかステキな王子様を求めているところに」

「ああ、そういうえばお姉ちゃんには今恋愛運がなかつたのでふね。なんなら過剰在庫気味な恋愛運をもらつてふか？」

「あうう、そういうわれるとなんだか欲しくなるわね……」

自分の恋愛運を手放してしまい、あんなにも恋愛運を欲しがつていたアティカだつたが、その記事を読んでいるとだんだん独り身でもよい気がしてきた。

「まあ、商品が入荷していくのは良いことでふ。一応、売れているみたいでふし。しかし、そろそろ金運と仕事運の在庫がまずいんじやないでふか？」

今まで過剰在庫気味だつたのであまり氣にならなかつたが、金運と仕事運の在庫が足さるとこことは、この姉妹にとつて致命的なことである。

仕事運がなくなると、商売という仕事であるために仕事がこない……客が来なくなり、経営自体が成り立たなくなつてしまふ。

また、生活が成り立つのは金運を使うためであり、これがなくなつてしまえば直接的な収入がなくなり、明日食べるものさえ不自由することになつてしまう。

「まあ、今月の寿命売り上げが既に48年6ヶ月あるから、しばらくは安泰でふ」

「だが妹よ、運が尽きた状態でそんなに長生きしてどうするのだ？」

「それはもう、自分の運だけで生きていくのでふ。お姉ちゃんみたいに安売りはしていないでふから」

「な……あんたは自分の運を商品にしていなかつたわけ！？」

「などと言ひ争つてゐると、チリンとドアのベルが鳴つた。

「こんにちは、どなたかいらっしゃいますか？」

ドアから入ってきたのは、スーツ姿でショートカットの、メガネをかけた大人の女性だった。なにやらビジネス用のかばんを持つている。

「あ、いらっしゃいませ、本日は運の買取ですか？」

「い、いえ、今日は保険の紹介にあがりましたの。私、こういうものです」

女性はビジネスバッグから名刺を取り出すると、アティカに手渡した。

「幸運保険販売員、サバーサリー……さん？」

「はい。私、幸運保険というものを取り扱つています。人の幸せには保障がありません。ですが、保険をかけておけば、万一不幸に遭つても大丈夫、ということです」

なにやら怪しげな勧誘に、アティカとカルチエはお互いの顔を見つめてぽかーんとしている。

「な、何この怪しい保険！？こんなのが怪しすぎるわよ！」

「まあ、私達のやつていることも十分怪しいでふがね」

自分の運に対する保険というのも怪しいが、運を寿命でやり取りするなんぞもつと怪しい職業だ。

「最初はどなたでもそのようにおっしゃるのですが……まずはこちらのパンフレットをご覧下さい」

販売員の女性、サバーサリーはビジネスバッグからB4サイズのパンフレットを取り出した。

パンフレットには、”幸運保険とは何か””どのような種類があるのか””加入した場合の保障”などが記載されていた。

「たとえば、仕事運保険ですと、仕事で事故にあつたり、不運でや

めてしまった場合に保障が降りるわけです

「それは単なる失業保険ではないでふか？」

「いえいえ、ちゃんと保障内容をじらんください」

そう言われ、カルチエは仕事運保険の保障欄を見た。

「……仕事で事故に遭つたら最長3年6ヶ月? 何でふか? これ?」

「寿命ですよ。つまり、仕事で運悪く事故に遭つてしまつた場合、3年6ヶ月分の寿命をお支払いするわけです」

「お支払いつて……一体どういうこと?」

アティカも、不可解な制度に食つて掛かる。

「あら、あなた達と同じよ。さすがにこのような商品をお金を出して購入しようとは思わないでしよう? なので、私達も寿命を担保として運営を行つているのです」

「なるほど、それなら納得でふ」

恐らく、普通の人なら納得しないだろう。が、アティカとカルチエは職業柄納得した模様だ。

「しかし、私は特に欲しい保険はないのでふ。今からエンジョイスパローズと阪兵ジャガーズの試合があるから、それを見てくるのでふ」

カルチエは残りを姉に託し、テレビに向かつていた。店員がこんなのでいいのだろうか。

「ちょ、カルチエ、私一人に対応させる気?」

「お姉ちゃんならかけたい保険とかあるんでないでふか? たとえば恋愛保険とか」

その言葉を聞いた瞬間、サバーサリーの目が光つた。

「え、もしかして、恋愛運保険をお求めですか? でしたら、オススメの商品がござります」

ビジネスバッグから別のカタログを出したかと思うと、ものすごい勢いでページをめくるサバーサリー。

「こちらです! 10年間恋人が出来なかつたら13年8ヶ月保障の恋愛運長期保険!」

「……恋愛運が無いのにさらに1~3年8ヶ月も生き延びると……」「それだけではありません! 今ならちょっとした恋愛運もサービスします!」

「うつ……」

”恋愛運”という言葉に惹かれてしまったアティカ。そもそも恋愛運がついてくるなら、保険のうまみが薄くなる気がするのだが。「さあ、いかがです? 1ヶ月で10日での保険寿命! これはお買い得ですよ?」

迷うアティカ。もはや1ヶ月で10日なのが妥当なのかどうかも勘定がつかない。

「わ、わかりました! 契約します!」

「ではこちらにサインをお願いします」

アティカが決断を下したのが早いか、いつの間にか契約書を出していったサバーサリー。

アティカはその契約書に、自分のサインを書いた。

「では、こちらが控えとなります。保険証券は後日郵送いたしますので……」

そういうと、サバーサリーは笑顔を見せて帰つていった。

「やつと帰つたでふか? ちょうどお客様さんが来なくて良かつたでふ」「でも、これでたとえ彼氏が出来なくてもいいの! そして恋愛運がちょっと増えたの!」

「保険料合計3年以上の寿命を払つてほんのちょっとの恋愛運でふか? だつたらうちの在庫を使えばよかつたのでふ」

「何を言つた妹よ、不確実な恋愛運より、堅実な保険に限るではないか!」

「もう何を言つていいのかわからないでふ……あ、また打たれたでふ。今日のスパローズは調子よくないでふね」

2~7の負け試合を見ながら不機嫌そうにカルチエが言つ。が、それを見目アティカは浮かれ気分だ。

「……で、契約内容はどんなのでふか？」

「えっと、1ヶ月に10日の保険料で、10年恋愛運が無かつた場合に13年8ヶ月保障。さらに恋愛運付加特約がついてるわ」

「大体そういう契約は、初回の契約料がかかるものでふが……」

アティカから契約書を奪い取り、契約内容を再度確認するカルチエ。

「えっと、初回契約料として寿命80年を支払う……って、え！？」

突然、アティカは倒れた。どうやら寿命が尽きたらしい。

「まったく、何よ、あのサギ販売員！訴えてやる！」

「よかつたでふね、総売り上げが148年あつて」

どうやらアティカが倒れたのは単に眠かっただけのようで、命に別状はなかったようだ。

「とにかく警察に通報して、あのサーバーサリーとかいう女を捕まえてもらうのでふ」

「……いいえ、もっと有効な方法があるわよ」

にやりとしてアティカはあるものを手にした。

「あ、それは……」

「あいつの名刺よ。これはどうやら会社で正式に発行されたもののようね。これを使ってあいつの運を強奪するのよ！」

「そ、そんな無茶な……」

例の怪しい機械は、免許証のような正式なものでなくとも、名刺のようなものでもその人の寿命、持っている運が分かるのだ。それを元に、運の買取や販売を行っている。

「いえ、これは因果応報、自業自得、百鬼夜行、勤務怠慢よ！」

「途中から意味不明になつてているでふ。それはそうと、勝手に人の

運を売買するのはやめたほうが……あ、もうピッチャー降板でふか「野球を見ながらの説得は、さすがに説得力がなかつたのか、アティカはすたすたと例の怪しい機械の元に向かっていく

「さあ、あいつのすべてを暴くわよ！」

名刺を機械に通すと、サバーサリーの寿命、所持している運が表示された。

「え、何？資本寿命1583年！？許せないわね！まずはその寿命を有り余つた恋愛運で強制的に奪つてあげるわ！おつと、パンフレットに手書きのサインがあるじゃない！これをまねして契約書に書いて……まあ、こんなにすごい仕事運が！これは根こそぎ強制買取してつと、金運も在庫無いから半分くらい買取つと、さあ、仕事運も金運もない状態で500年ほど長生きするがいいわ！」

普通は契約書に本人がサインすることで契約が成立する。が、その人のサインがあればその筆跡を真似するだけで契約が成立するといふとんでも仕様である。

「ああ、お姉ちゃんが壊れたでふ。まあ、今回はあの人があいでふから、見逃してあげるでふ」

「このような姉の暴走を防ぐための妹カルチエの存在だつたのだが、今回ばかりはとめられなかつたようだ。

「あ、臨時ニュース……」

「今日昼過ぎ、幸運保険と名乗つて運勢に掛ける保険を販売し、客をだまして法外な寿命を搾取していたとして、保険販売員、サバーサリー容疑者を詐欺及び殺人容疑で逮捕しました。調べによりますと、サバーサリー容疑者は”幸運に保険を掛けることによつて寿命を延ばすことができる”と話し、客に法外な契約料寿命について説明せずに契約させて契約者を死亡させた疑いがかかつております。

警察の調べに対しサバーサリー容疑者は……」

(後書き)

こんばんは、フイーカスです。続編の希望がありましたので、以前から構想していた「保険」の話を絡ませてみました。

じっくり練ったわけではなく、2時間かそこらで考えた話しながら、内容が薄くて短文になってしましました。

今回は2段オチということをやつてみたのですが、うまくいったのでしょうか。

それについても、サバーサリーはこの後どうなるのでしょうか。気になるところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4267p/>

幸運保険販売員

2011年2月26日00時55分発行